



制度改革だけでは 「医療崩壊」は防げない

渡島医師会
木古内町国保病院 病院事業管理者
小澤 正 則

地域医療供給体制の混乱から「医療崩壊」が叫ばれて久しいが、一向に回復の兆しすらみえず、泥沼はこの先どこまで続くか分からないという不安が、黒雲となって日本の全土を覆い尽くして希望のひさしを遮っている。ことに過疎化の進む地域ではその問題は一層深刻で、北海道はその典型であるようにみえる。

医療供給体制の乱れは、いくつかの原因が複合していると言われている。主因には医師の地域および診療科偏在が挙げられ、その背景として医師数の絶対的不足、医療費の政策的な抑制、新医師臨床研修制度の弊害、女性医師を含めた医師労働環境整備の遅れ、医療業務の複雑・煩雑化によるマンパワーの増大、医療安全に対する過度な社会的要求など多岐にわたるが、挙げるべき要因はこれでもまだまだ不足かもしれない。これらの対策についてはすでに種々の立場から論じられているのでそれに譲るとして、ここでは私なりに少し視点を変えて考えを述べてみたいと思う。

これまで社会のシステムは、時の移り変わりに対応して進歩と退歩を繰り返しながら新しいバランスを保って推移してきた。

昔は船や列車で上京したものが航空機に代わり、ソロバンがコンピュータ、そして新聞がインターネットへと作業効率の限らない向上がもたらされると、人工化された感覚、つまり人間の恣意・都合で時間がどのようにでも操作できるという感覚が、知らず知らずのうちに私達を襲ってきているように思われる。また、空間も合理化・効率化されるということになり、そうなればなるほどに丁度、円形監獄にいるように四六時中、周辺から見張られているという感覚に追い込まれることになる（東京大学出版書の引用）。こうして本来、豊かさをもたらすはずの文化が、くしくも「ゆとり」を奪ってゆくという大きな矛盾の中に必然的に巻き込まれてゆくことになる。こういう問題は、日本の文化の傾向、つまり時間や空間を最大限に無駄なく効率的に使うという傾向と符切を合わせているように思われる。

こうした日本文化の総体としての変化の流れが、医療の背景にも存在しており、これが、医療の提供者と受け手の双方に基本的な課題を問い直しているようにも思えてならない。

私はかつて、アフリカのある発展途上国で暮らし、いい加減とも思えるファジーな世界は、相互に過度

の合理性を要求しない社会であり、人間の自由な領域を侵すことがないことを経験した。速さと方向を勝手に変えうる時間感覚を駆使して、相互の依存と信頼を基調にして暮らす素朴な伝統への固執は、実は私たちがとうに失っていた豊かさの一面をもっているものであった。

日本の現在において、医療者の職場での「ゆとり」の喪失は、これを家庭や趣味という現実逃避的行動に画策する。この方向性は従来医療者にとって金科玉条の価値であった使命感の放棄にみえるが、何人もこれを否定できる術を持たない。医療の受け手にとっては、高度に進歩した医療がその治療効果を飛躍的に進歩させたことで、その消費者意識をさらに上の可能性へ向かわせ、要求し、期待度を限りなく増長させてきている。この結果が医療の現場では大きなストレスを産み、現実的には齟齬の源になって相互の溝を深めてきているように思われる。受け手側に対しては、罹患した疾患の十分な知識とともに、医療施設ごとに医療提供の現実には限界のあることを理解していただくことが必須と考えているが、理解はしても納得は容易ではない。

現在の医療崩壊を立て直すとは、昔の供給体制をそのまま復活させるのではなく、時代背景を十分考慮したより持続的かつ合理的な対策で応じる必要があると思う。本来、基本的人権としての健康は、制度で一律に誘導されるのではなく、自から勝ち取るものであり、そのための行動を支えるさまざまな条件が国家的責任において整備されるべきものであることが示されなくてはならない。例えば過疎化は防止できないとすれば、インフラを整備するために多くの人にとって新たな集落への移住は避けられない課題であろうが、同時にスカンジナビアのフィヨルドの崖のてっぺんに家を建てて住んでいる人達のように、一律の価値基準をお仕着せするのではなく、自主的に自分の生き方を選択して主張することも許容できる社会でなくてはならない。過疎化と医療崩壊が直ちに社会の大きな欠陥であるという見方には反対すべくもないとしても、これを契機に人の普遍的な生き方にとって尺度の異なる基準で解決を図ることもあながち不可能ではないかもしれないと考えてみてはいかがだろうか。健康な時なら人里離れた自然に抱かれた生活をし、健康に問題が生じたら病院の近くに住まう、そのときどきの健康状況に合わせて人は生き方を適時に選択し得てこそ、「豊かさ」ではないだろうか。

私達は皆、医療の本質的な問題を、大きな文化の流れの中で、しっかりと見据えることによって、時代に則した新たな価値観を創設しながら、したたかに人生を楽しむ術を習得する必要があるであろう。こういった死生観を含めた健康教育は幼少時からきちんと行うことで真の「豊かさ」を実感できる社会が構築されるようになるものと思われてならない。